

養護学校高等部生徒の現場実習

－ 和歌山大学教育学部附属養護学校の試み －

On the Job Training of Students in Senior High School for Mentally Handicapped Children
－ An experiment at School for Mentally Challenged Children attached to Wakayama University －

有田 孝子

ARITA Takako

(和歌山大学教育学部附属養護学校) (和歌山大学教育学部附属養護学校)

大谷 博俊

OHTANI Hirotoshi

池際 博行

IKEGIWA Hiroyuki

(和歌山大学教育学部)

和歌山大学教育学部附属養護学校高等部の全生徒を対象に、毎年、春と秋の2回実施している現場実習は、生徒の卒業後の進路を決定する職業選択のための大切な機会であるとともに、働くことの意味・必要性・重要性を体験をととして理解させる重要な教育活動である。今回、和歌山大学事務局の理解と協力を得て一般事務部門での実習が実施できることになった。知的障害の生徒を対象にこのような実習の場が与えられることは全国的にこれまでほとんど例がない画期的なことであり、今回の実習が知的障害をもつ生徒の就労の可能性の拡大に大いなる示唆を与えた。

キーワード：養護学校高等部生 知的障害生徒 現場実習 一般事務業務 事例報告

1. はじめに

知的障害の児童・生徒が通う和歌山大学附属養護学校は、小・中・高等部から構成されている。とりわけ高等部はその最終学部として、将来の就労を目的とすることはもちろんであるが、カリキュラムの中で、働くことの意味やその必要性を理解し、労働することの喜びや役割を実際に体験することを目的として1年生から3年生までの全生徒を対象に年2回春と秋に、現場実習を行っている。現場実習は、多くの養護学校がそうであるように、進路就職担当の教員が受け入れ先を求めて市内外の製造業、部品工場、食品工場、スーパーマーケット、清掃業等様々な業種に出向いてお願いし、理解ある相手先との直接交渉で実施してきている。職種として知的障害の生徒にはほとんどこれまで考えられてこなかった事務処理部門での実習の可能性を求めてきたが、このたび、大学執行部の理解を得ることができ、事務部局において現場実習を実施できることになった。具体的には、大学本部総務課に1名、大学附属図書館に3名、教育学部総務係に1名の生徒を派遣し、そこで1週間ないし2週間の現場実習を行った。このような事例は過去にほとんど見られないものであり、今後の知的障害養護学校生徒の職業選択の道を探る意味からも参考になる新しい試みとして参考に

なると思われるので報告する。

2. 養護学校における現場実習について

総務省では障害者の就労等に関して以下のような評価書¹⁾を出している。

養護学校において、現場実習は、現実的な条件下で、生徒の職業適性等を明らかにし、職業生活ないしは社会生活への適応性を養うことを意図して、第1学年時から第3学年時まで各学年において行われているが、第3学年時に実施される現場実習は、就職を希望する生徒においては、単に就業体験としてよりも現場実習先への就職を目指すという意味合いが強くなっている。一方、これらの生徒を受け入れる事業者にとっては、現場実習を通じて生徒の適性や作業能力、対人関係における協調性等を把握し、雇用の可否を判断する機会となっており、こうしたことから、現場実習先の開拓は、実質的に生徒の就職先（求人）の開拓の意味をも有している。

現場実習先の開拓に当たっては、多くの求人情報を有し、かつ、障害者の雇用について事業所を指導している公共職業安定所と養護学校との連携が図られることにより、その効果として現場実習先の確保が進み、ひいては生徒の就業可能性の増大等の良い影響を与え

ることが期待される。

また、その後引き続いて行われているかどうかは明らかではないものの、本報告でおこなった知的障害者の事務部門における実習受け入れを試みた先進事例²⁾としては、以下に示す公官庁におけるものが数少ないながら認められる。

- ・養護学校生徒の県庁舎での現場実習受け入れ
(平 13) (神奈川県)
障害児教育課で高等部 2 年生の現場実習を月 1 回各 1 人を受け入れ (原則的には 1 人 5 日間で事務的業務等で実習)
- ・県庁舎への知的障害者の職場実習受け入れ
(平 12) (大阪府)
本庁事務部門で実施

以下では、本校で初めて取り組んだ、知的障害生徒の事務部門における現場実習について依頼、受け入れ、実施と問題点、その後の感想を経過を追って具体的に記載した。同様な試みを志向している関係諸学校への参考としたい。

3. 和歌山大学教育学部附属養護学校高等部について

和歌山大学教育学部附属養護学校では、将来構想検討委員会 (平成 9 年、10 年度) 将来構想推進委員会 (11 年度以降) を設置し、将来構想として以下の方向性を確認し、21 世紀のビジョンとして位置づけた。すなわち、

- ①高等部生徒の障害や教育的ニーズに応じた教育課程とコース制を充実、発展させた職業学科の設置、
 - ②障害児の生涯学習教育にも対応できるような後期中等教育の展開、
 - ③小中高等部の一貫教育における生活教育、職業教育、情報教育、健康・体育教育及び情操教育の先進的教育実践の充実、
- というものである。

盲・聾・養護学校では、これまで、卒業後、企業等の進路先への移行を円滑に進めるため、進路指導上の課題解決に向けた個別の支援を行ってきた。近年、企業では事業の縮小、余剰人員のリストラや倒産などが増え、雇用情勢が悪化している。この厳しさは、健常者だけでなく、知的障害者にとっても同様である。また、知的障害養護学校高等部入学者の障害の重度化、多様化が進み、卒業時点での就職が困難な生徒が多くなってきており、障害児のよりよい社会参加の実現のために、職業的自立を支援する重要性が指摘されている。公立の養護学校においては、高等部の単独設置による養護学校 (高等養護学校) や職業学科 (例えば、

都立青島養護学校の都市園芸科など) の併設により、知的障害児教育における職業教育の充実・改善のための努力が行われている。また、個に応じた就業支援のより一層の充実を図ることが求められてきている昨今、個別の就業支援計画や就労支援のための個別移行支援計画は、これらを具現化するためのものであると考えてよいだろう。しかし、国立大学附属養護学校においては、コース制の導入は見られるものの、職業学科を明確に位置づけている高等部は今のところ見あたらない。

和歌山大学教育学部附属養護学校では、平成 6 年度より教育課程の類型化 (生徒の障害、発達 の程度や指導目標の異なる 2 コース制) を開始している。そして、その指導成果の積み上げと検証、先進校の情報の収集と分析及び障害児教育や労働行政の推移を慎重に検討した結果、平成 15 年度より高等部に総合産業科を設置し、試行を始めた。総合産業科では、知的障害を有する生徒及び保護者の教育的ニーズに応え、学科としての指導効果を高めるために対象生徒を特定している。また、総合産業科では普通科との違いをより明確にするために「職業的自立」「体力の向上と自己管理」「社会的自立のための基礎学力」「青年期の充実」「よりよい社会生活の構築」という 5 つの指導の重点を設定した。このような対象生徒の明確化と指導の重点の設定による総合産業科の在り方は、職業的自立を目指す生徒の育成に寄与し、先に述べた障害児教育への要請に応えうるものであると確信している。

4. 和歌山大学事務局部門における現場実習

4.1 実習先決定に至る経緯

今回、大学において現場実習を行うにあたっては、以下の経緯を経て実習先が決定されたがその流れを示す。

- 1 本校校長から大学の理事へ本学の行っている現場実習についての説明及び現場実習実施先としての依頼
- 2 大学運営関係者に対する附属養護学校の現場実習の説明会の実施

説明会では、これまで知的障害児者については観念的に理解されているものの、その実情については十分に理解されてはいないのではないかということから、養護学校に通う児童生徒の実態を理解してもらう目的で以下の内容を説明した。

知的障害について

- ・知的障害とは日常的な具体的な事柄については理解することはできるが、抽象的なことを考えたり、複雑な計算をしたりすることを苦手とする障害

- ①本校の紹介 (所在地・小、中、高等学部そ

それぞれの生徒数等)

・所在地は西浜地区、和歌山県立工業高等学校や西浜中学の近くである。

小学部 14 名 中学部 17 名 高等部 27 名の生徒が在籍している。

②本校の現場実習について

・現場実習とは生徒が社会の中で実際に働く経験を通して働くことを学び、卒業後の進路を考える学習である。

③現場実習が必要な理由

・生徒は、社会の中で実際に働くことで職場の人が働く姿を目で見て、職場の人から教えてもらったことを耳で聞き、そして仕事の大切さを体で感じることで初めて働くということが理解できる。学校ではできない学習である。

④附属養護の現場実習の実際

・高等部全員が参加している。
・時期と期間について 6 月に 1 週間と 11 月に 2 週間である。
・実習先の選定については生徒にどのような仕事が向いているのか、生徒が将来どんな仕事をしたいのかなということと、受け入れ先の要望などをもとに決定している。3 年生については卒業後の進路先を探る機会ととらえ受け入れ先と話し合いを持ちながら行うこともある。

⑤現場実習の流れについて

・進路担当教諭が実習先を訪問、担当者と時期、期間、就業時間、仕事内容等の打ち合わせ
・実習が近づくと生徒の挨拶（通勤の練習も兼ねて）
・実習の事前指導
・実習の開始に伴う教師の指導
・実習終了後の実習先からの評価

⑦現場実習先からよく出される質問と答え

・実習は 1 年に一回（1 週間から 2 週間）です。
・給料はいただきません。
・事故などについては学校保健で対応いたします。
・交通費などは保護者が負担いたします。
・昼食費なども保護者が負担いたします。
・現場実習は養護学校の教育活動です。

その後、附属養護学校としては 1 年生 4 名（1 週間）と 2 年生 1 名（2 週間）の実習生の受入れ先を希望している旨の依頼を行った。

3 大学で附属養護学校の現場実習について課長・事

務長会議で、受け入れ可能な業務等について検討及び回答をいただいた。

4.2 実習先の決定ならびに実習の内容

1 年生 1 名（男子）は、総務課において、訂正箇所シール貼り、火元管理責任者カードの作成、パソコン操作（WORD EXCEL を使った簡単な書類作成）などが、1 年生 3 名（男子 2 名および女子 1 名）については附属図書館において、カウンター貸出業務、返却本を書架に戻す作業、図書のバーコードシール貼り、学内ポストへの配達作業などが、2 年生 1 名（男子）については教育学部総務係において、訂正箇所シール貼り、火元管理責任者カードの作成、パソコン操作（WORD EXCEL を使った簡単な書類作成）などが実習内容として与えられた。

これらの実習内容に対処するため、附属養護学校においては以下のような準備学習を行った。

1 時間/週「進路」の授業

・その他授業のほかに ハローワークによる職業相談や職場見学 職業センターによる職業ガイダンス ハローワークや職業センターへの見学 現場実習報告会などの進路学習を実施している。
・現場実習が近づくと職場のルール、心構え等の学習内容を盛り込む。

現場実習の事前学習（現場実習前、2～3 日）

・実習先への通勤経路の学習、実習先への挨拶
・実習先での作業内容について
・実習先の更衣ロッカーやタイムカード、実習ノート提出場所、昼食場所などの確認
・職場によっては白衣の着用の仕方や手洗いの仕方衛、生学習など
・実習ノートへ必要事項の記入作成等（実習先の名称・所在地・連絡先 実習期間・時間 持ち物 指導者名 連絡先などを記入）

4.3 保護者、実習先職員および指導教諭の感想

4.3.1 保護者の感想

①企画総務課の職員の方たちにも親切、丁寧に指導していただき、優しい人でよかったと本人も言っていました。一人実習も初めてだったのですが心配することは何もなかったです。パソコンやワードやエクセルを教えてもらって続けてやっていたらこれからは使っていけます。充実した実習でよかったです。

②図書館：帰宅すると何もなくてもすぐに日誌を私（母親）に渡し、毎日日課のように行っているお弁当箱と水筒を洗い、テレビゲームをしてもよいかと尋ね始めるという行動にもきびきびした様子が見られ参観に行

かせていただいても、なんだかしっかりとした態度に今までよりもひと回り大きくなった感じがしました。心配していたコミュニケーションも実習先の方々のご配慮により心配することなく済み、我が子も楽しくこの実習を過ごさせて頂きました。

③図書館：和大大での図書館のカウンター業務や本の整理なども一生懸命頑張っていました。いろいろなしごとをして自信がついたと思います。

④図書館：図書館は仕事が気に入っていたので楽しそうでした。人相手の仕事も変化があつていいのかもしれない。今まで思っていなかった一面をみることができました。

⑤教育学部事務室：たった30分（現場実習の保護者参観時間）でしたが、安心して見ていられました。どんな仕事かと思い心配していたけどよかったです。

4.3.2 実習先・大学職員の感想

・企画総務課：1日目 各作業について覚えも早くスムーズにこなせた。2日目 作業は常に集中して行っており、スピードも速く感心しています。3日目（パソコン）入力データ確認（読み合わせ）合計768データ入力誤りなし完璧でした。4日目 全てにわたりまじめに手早くできていました。電話対応も的確にこなせていました。5日目 5日間を通して、まじめにもくもくと手早く作業ができ私たち職員も見習うところがありました。

・教育学部総務課：1日目 それぞれの業務内容についての飲み込みも早く、与えられた業務に対して集中できており、作業もそつなくこなせた。2日目 昨日はじめての作業については、こちらから特別に指示しなくともスムーズにこなせていますが、教官ボックスに郵便物を配付するのに苦労しているようです。また、わからないことについては質問してくれます。慣れない仕事なので少し緊張しているようですが、打ち解けてくれるようにこちらからも積極的に話しかけています。3日目 日を迫うごとに手順が増えてきた郵便物発送準備は、着実にこなしています。郵便物発送票作成は、パソコンを使って宛先・数量・郵便種別・費用の摘要・切手の券種を入力していくものです。かなで入力し、漢字に変換するところも確実にできていました。職場の人とも慣れ、休憩時にはお家のことやガンダムのお話などしました。4日目 郵便物の発送準備では、国内郵便物（定形や定形外）の料金計算や郵便切手の貼付けを間違えることなくできました。5日目 いずれの作業も、特に指示しなくても迅速にでききとこなしてくれます。6日目 郵便物の発送については、重量を量り、金額を計算し、切手を貼るまで間違いなく迅速にできました。7日目 手際よく、黙々と作業をこなしました。現場実習も今日で7日目、総務課の人々の間ではずいぶん慣れてきた様

子ですが、今日午後から業務を行った教務係では初めて会う人も多く、少し緊張していました。8日目 手際よく、黙々とこなしました。9日目 目次作成については、キーボードのカナを探すのに苦労をしているようで、思うように作業ははかどらなかったようです。変換ミスもなく文字配列が飲み込めれば作業スピードも上がると思います。10日目 2週間の実習で、パソコンによる業務より、郵便物発送準備等が興味を持てたそうです。100余人の教員ボックスの位置を2日で覚えるなど、覚えが速いので驚きました。図書館：1日目 仕事に対する積極性があり、また、物わかりも良く、こちらが「次に何をしてもらおうか？」と考えるほどでした。明日からも次々と新しい仕事ができると思いますのでこのままの調子で進んでくれたらと思います。2日目カウンターでの仕事は、もう手馴れた感があり、間違うことなくすいすいとこなしています。少しあわてるところがありますので、ゆっくり落ちついてやればもっとよくなりますね。

3日目 一連の仕事はほぼ完璧に出来ています。それ以上に利用者への挨拶も僕達の言動を真似てくれているようで非常に頼もしいです。4日目 今日は新しくコピー機の使い方も学びましたが難なくこなしていました。5日目 理解、行動も早く、図書館で働きたいと言ってもらえるのは光栄なことです。これから先、楽しい仕事ばかりに当たるとは限りませんがそんな時でも自分のすることが他人のためになっていると思えて頑張っていけたらいいですね。

4.3.3 指導教諭の感想

・総合産業科1年生にとって、一般の事業所での一人実習を行う（2年生）前に、和歌山大学で実習をさせて頂くことが大きなメリットだったように思われる。

まず、総合産業科といえども、1年生の段階では「就労」に対する力の幅が大きく、一人実習にチャレンジできそうな者、やや力不足で何らかのサポートが必要と思われる者、またグループ実習が適当である者など、実態が様々である。そのような実態であるため、従来ならば個々に応じて別々の職場で実習させて頂くか、または1カ所で同じ仕事に取り組むかの選択しかなかったところである。しかし、大学という一つの敷地内で、個々に応じたいろいろな職場を提供して頂けたこと、また「教育」にご理解ある職員のみなさまにご指導頂けたことは、生徒にとっても、現場指導を行う附属養護学校職員にとっても、大変ありがたいことであった。また、大学キャンパスは、校外学習やおくやまこども会などの課外活動で、本校生徒にとってなじみの深い場所であり、広いキャンパスの開放的な空間も、現場実習という緊張感を和らげる事ができたようで、実習生たちも実力を発揮する事ができたようである。「働く」ことへの自信をもち、次にチャレ

・一つの仕事だけでなく、いろいろな仕事を用意していただいていたので、メリハリがあってそれぞれの仕事に集中できたように思われる。



5. まとめにかえて

進路指導は、「生徒が自己のあり方生き方を考え、主体的に進路を選択できるよう、学校の教育活動全体を通じ、計画的、組織的な進路指導を行うこと」であり、「生徒が自己理解を深めるとともに、自己と社会とのかかわりについて深く考え、将来の生き方、進路を選択して、将来の生活において望ましい自己実現ができるよう指導・援助を行うことが強く望まれる」とある。「働くこと」は社会的な視点と個人的な視点の両面から見ることができるが「個人的な視点」は収入を得る手段のみならず、むしろ自分の能力や興味を発揮して、様々な心理的な満足を得る源泉であることに注目する。障害があっても、仕事について職業的に自立するなかで生涯にわたる「生活の質」の向上を目指すことは重要である。

障害者の社会参加が進み、就業に対するニーズが高まりを見せる中、1997年7月「障害者の雇用の促進に関する法律」が改定され法定雇用率が1,6%から1,8%になって制度的にも障害者の就労への道が少し広くなった。また、知的障害者の雇用状況を産業別に見ると製造業が59,2%、サービス業が27,7%、卸売・小売業、飲食店が8,8%となっている。製造業にしても機械化が進み多くの人手を必要としなくなっていく方向に進んでいる。

そのような状況のなか、障害者一人一人の実態を理解し、その特性を生かし、十分に持てる力を発揮できるような仕事を選択または提供できることが必要である。そのためには現在、働き手が必要とされる職業や仕事に従事できるよう支援していく必要があると考える。

今回の大学の現場実習での成果は、一つには事務補助という今までにない新しい職種の実習に取り組ませていただいたことである。知的障害の生徒の実習ということもあり、「事務仕事」のなかで知的障害者にどのような作業を抽出できるのかは未知のことであったし、さらにそれを探るとしても実習先の多大な協力なしでは実現できない。前出の「実習先の決定ならびに実習内容」「実習先大学職員の感想」にあるように今回たくさんの作業に挑戦させていただき、丁寧な取り組みの様子を知らせていただくことができた。知的障害者のこの分野での果たすことの可能な作業内容を提示していただけたことと、それを果たすために必要な力、教育、学習等を示唆いただけたことは大きな収穫であった。

もう一つは、図書館のカウンター業務等をさせていただいたことである。知的障害者の就労先も製造業からサービス業へとその割合が移行しつつある現在、接客という人との対応していく力が求められていると考えられる。しかしこのことについても実習先で取り組

むことをお願いするのは非常に難しい事柄である。大学、それも「客」の大半が学生であるという環境においてこそ、未経験のことに挑戦し、それに十分な指導を可能にする実習となった。「接客」という作業については、例えばスーパーの就職した場合、野菜の袋詰め等の作業だけではなく店内へ品出しもありそのときなど客から質問を受けることも考えられる。そういう業務への対応ができることで採用の可能性もより高まることと思われる。電車や駅構内の車両清掃業務についても同様であると考えられる。今回おこなった、他の事業所での実習での困難な事務仕事や接客業務についての実践は生徒の能力の可能性を確かめることや進路開拓につながった。これらの今まで挑戦しがたかった分野での実習を実現できたことは大きな成果である。

本校は高等部の生徒全員が現場実習に取り組む。つまり、現場実習を教育活動ととらえ障害の重度の生徒も経験するのであるが、実習先の大きな協力と支援があつてこそ実現できるものである。近年、障害の重度多様化が進む中、これらの生徒対象の実習先としても大きな期待を寄せている。

障害者の就労については、近年さまざまな支援が立ち上げられている。16年度、障害者を就労だけではなく生活ごと支援していく必要のあるケースの支援をする就労・生活支援センターが立ち上げられた。17年度には養護学校の現場実習を支援するジョブ・サポート事業も立ち上がるということである。今回の実習は大学職員の方の多大な協力で実現できたものである。これからも大学での実習が引き続き実施されることであるが、17年度に立ち上げられるジョブ・サポート事業は実習先での職員の方の負担を少しでも軽減する助けになるものと期待している。

謝辞

本報告をおこなうにあたり、附属養護学校生の事務部門における現場実習に多大の理解を示し、協力をいただいた和歌山大学事務局に感謝いたします。また、実習先として生徒をご指導いただいた大学本部総務課、教育学部総務係、附属図書館事務局の職員の皆さんに心よりお礼申し上げます。

文献

- 1) 総務省：「障害者の就業等に関する政策評価書」、平成14年4月
- 2) <http://www.normanet.ne.jp/~vocreha/1.htm>